

「舞姫」は私たちになにを教えてくれているか

はじめに、私はこの「舞姫」を読み、豊太郎の悩み苦しんだ結果は、決して豊太郎にとって満足のいく結果ではないので、なぜハッピーエンドではないのか、豊太郎がうまく出来なかった話により私たちは何かを得られるのではないのかと思った。そして、「舞姫」はなにを言いたいのか、「舞姫」を通して森鷗外は何を伝えようとしたのか、つまり、「舞姫」は私たちに何を教えてくれているのかと思い、このテーマを選んだ。

これから私は、当時の時代背景、豊太郎の人物像により話を展開し、結論として「舞姫」は私たちに対して自分の意思をもつことの大切さを教えてくれているのではないかということをおもう。

まず、この頃の時代背景である。今は留学といってもお金さえあれば誰でも行くことができ、個人の質を高めるためのものである。しかし、今と違い、明治のこの頃では、豊太郎の留学は国費での留学であり、明治維新を果たした日本政府にとって近代体制の樹立が早急とされている中で、先進国である西洋に行き、文化にふれ、国家の資本主義の発展の基礎を築くためであった。

豊太郎は、大学法学部を首席で卒業し、学士を得たのち官僚となり、語学にもすぐれていて、さらに、留学生として選ばれたエリートである。しかし、彼の行動は国家的な観点でものごとを見つめる姿勢はなく、個人的な興味ばかりが優先されている。たとえば、豊太郎は法学部卒なので本来、国家留学生としては、法の問題はもちろんのこと、先進国で現状採用されている法律の細かい部分まで学び、それが日本に当てはまるかどうか検討すべきである。だが、豊太郎は、法律の細部に興味を示さず、法の問題を理解した気になるだけで十分であり「細かい法律の文書にこだわるべきではない」などの自論をのべている。

さらに、豊太郎の内面は、「物にふれると縮んでにげようとする」、「外物を捨てて顧みるほどの勇気がない」など、弱い心を持ち、勇気がない。心変わりしやすく意志が弱く、ただ他人がしいたルールの上を歩くことしかできないような小心者である。

豊太郎は、能力はあるが、内面的な部分では国家留学生に相当しない人間だった。

豊太郎のこの弱い心のせいで、母には生きた辞書、官長には生きた法律にされそうになったり、誰かが豊太郎のために作った道をたどるために、自分自身や他人もあざむいていた。さらに、エリスは、豊太郎のことを偽りのないものと深く信じ、豊太郎が旅に出ているときには、愛を確かめるようなことを手紙で書いているので、本当に豊太郎のことを愛していたが、結果的にパラノイアになってしまった。

この時代では、明治維新の直後の混乱期、成長期の中で、個人の運命は翻弄され、必ずしも本人の思いどおりにはいかなかったこともある。しかし、豊太郎に関しては少し違う。豊太郎がはっきりとした意思を持っていないせいで、国家を建設するエリートになること、

エリスと一緒にすること、両方に中途半端で、汚名を負ってしまったし、エリスと一緒にすることはできなかった。豊太郎は「僕は許されざる罪人だ」など後悔している。

豊太郎がもう少し自分というものを持っていたのなら、この話の結末はきっとどちらかを失ったとしても変わっていただろう。きちんとエリスと話すことができたかもしれない。また、器械的、受動的な人にはならなかっただろう。

これらのことにより、私たちは豊太郎の経験により、教訓を得て、自分の意思を持たなければならいことがわかる。意思をきちんと持ち、示すことで、周りに振り回されることは当然減るのである。つまり、「舞姫」は私たちに対して自分の意思を持つことの大切さを教えてくれていると思う。

いまだ残る疑問点は、なぜタイトルを「舞姫」としたのか。タイトルは、話全体のことを意味している。森鷗外はタイトルにどんな意味を表そうとして「舞姫」というタイトルをつけたのだろうかということが未だ残る疑問点である。

参考にした Web

○<http://kenbox.jp/monsterbox/bungaku/maihime.htm>

○http://www.osaka-c.ed.jp/ikuno/03_study/kokugo/maihime/maihime-yaku.htm